



マストを倒して水路を走る、コンパクト・ホライゾンキャット。その後ろにいるのは、愛知万博のためにスペインから回航してきた復元帆船(ビクトリア)

コンパクト・ホライゾンキャットで 海から楽しむ東京湾景

文=森下嘉樹本誌
text by Yusuki Morishita (KAZU)
写真=矢部洋一
photo by Yabu Yabu

大は小を兼ねない

アメリカ人が中心になってポケットクルーザーの情報交換をしている場を、インターネット上で見つけた。「ザ・スモールボート・クルージング・サイト」(<http://www.pocketcruisers.com>)という名の通り、ここには最新のニュースや売りたい買ったしコーナー、掲示板など、小型艇に関するさまざまな情報が飛び交っている。

ところが、英和辞書を片手に興味深く読み進めていくうちに、ちょっとした違和感を覚えた。話題になる船のサイズが大きいのである。小型艇の情報を混ざって「28ft以下で、最良の船は何でしょうか?」とか「26ftトレーラブルボートが新発売」というような会話が堂々と交わされているのだ。

首をかしげつつ読み返してみると、このサイトにおける「ポケットクルーザー」の定義が掲載されていた。

いわく「ポケットクルーザー: 名詞。本ウェブサイトにおいては、全長28ft未満のレクリエーション艇で、湾内およびその付近の海域において、オーバーナイト・クルージングができる航海能力、装備を備えるものを指す」

28ftといえば、日本人の感覚では中型艇に入ると思う。スモールクルーザーやポケットクルーザーというなら、20ft前後という印象がある。筆者自身、26ftヨットを持つ身であり「自分のヨットは中型クルーザー」と信じていただけに、なんとも微妙な定義を突きつけられたわけが、そのあたりは40ft、50ftが当たり前のよう浮かんているアメリカのお国柄な

のだろうか。

もちろん船は大きければいいというわけではない。維持費やメンテナンスなどの経済性もさることながら、小型艇には大型艇にはないメリットや遊び方も多い。たとえば、1~2人で十分取り回しができる扱いやすさ。出入港やセール揚げ降ろしも楽にできるから、クルーが揃わないために出艇できないという悲しい思いをしなくてもいい。小さく、水深の浅い入江でのガンクホーリングも、小型艇ならではの楽しみ方だろう。あらゆることが大型艇に比べて楽に行えるので、気軽に船に乗ることができ、その結果、乗艇回数が増えるという相乗効果も生まれる。

逆に、小型艇のデメリットを考えてみると、その小ささゆえの艇速の遅さ、時化た海での

乗り心地、乗艇人数や搭載物の制限などが挙げられる。

こうした長所、短所を知った上で、スタイルに合わせた船を選ぶことができれば、大型艇とはひと味もふた味も違う、豊かなスモールボート・ライフが楽しめるはず。

ここに紹介するコンパクト・ホライゾンキャットは、まさに冒頭で紹介したウェブサイトが定義するポケットクルーザーである。昔ながらの雰囲気を持ちつつ、手軽さと機動力を併せ持つ、オーバーナイト・クルージングもこなせる20フッターだ。

コンパクト・コンパクト

つい先日、旅先で軽自動車をレンタルした。

普段から大きいクルマに乗っているわけではないが、その軽自動車の想像以上に広い室内空間と、軽快な走りに、「お、なんだ、これで十分じゃないか」と驚いた。コンパクトカープームを経て、軽自動車に対する考え方や作り方も変わった結果なのだろうが、今の軽はほんとうに侮れない。

ポケットクルーザーが軽自動車同様の進化を辿ったとはいえないまでも、普段40ftに乗っている人でも、実際に小型艇に乗ってみると「小人数でのショートクルージングは、これと十分」と感じる人は多いと思う。

いわゆるメガヨットといわれるような大型艇を別にすると、もともとクルージングヨットは、限られたスペースを効率よく使うことに腐心してきた乗り物といえる。操船エリア、居住エリ



スモールボート・クルージングのススメ
小舟の愉悅